

かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)

電話 66-1311
FAX 66-1314



米美分教会

明治29年1月18日 岡山部属大仙分教会 設立
昭和17年3月23日 部属変更・移転・改称(米美)
昭和39年5月26日 神殿移転建築
昭和40年7月9日 落成奉告祭

教祖百四十年祭 笠岡大教会活動方針

つながろう、おやさまのお心に。
つなげよう、信仰の喜びを。

活動
目標

ひながたを学び、そのお心を実践しよう。



立教187年
2月号

大教会長様お話

教祖にお喜び頂ける

成人の姿を求め続ける1年に

1・20年頭会議において

立教186年大教会年頭会議は、1月20日午後1時から大教会神殿で行われ、役員・部内教会長夫妻・布教所長らが参集した。

大教会長様は、先ず、真柱様年頭のごあいさつを拝読され、そのなかで一番大切だと思ふ点を述べられた。続いて、年祭活動2年目を通るうえで、「①持ち場・立場に応じて、親神様・教祖がお喜びくだされるに相応しい振る舞い・行いを思案し続ける、②それぞれの教会に繋がる皆に年祭活動を実践してもらえらるるよう、諦めることなく丹精し続ける、③ふしに直面したときにこそ、そこに籠もるをやるの思いを見つめて通る」1年にしていきたいと述べられた。

引き続き「おたすけ推進の集い」(3月号掲載)が開催され、その後、3年振りに会食が催された。

(要旨は次の通り)

【真柱年頭の「あいさつ」】

明けましておめでとうございませす。昨年は、いろいろとご苦労さまでした。本年もよろしくお願いいたします。

昨年の暮れは、私には珍しく、新年の準備も順調に終わりました。例年よりもゆったりとした気持ちで新年を迎えたのであります。が、元日早々、大地震という大変な姿を見せられてしまったのであります。この中には、強い揺れを経験した人もあれば、部内教会、布教所、信者が被災したけれども、すぐに駆けつけることもできず、心配なまま、ここに集まってきたという人もいるでしょう。心よりお見舞い申したいと思ひます。

地震について言えば、おふでさきでは、天災を月日の残念、立腹と仰せられているのはご承知のところでしょう。それは、教祖の教えを信じ教祖の道を通らせていただくお互いの、心の成人の鈍さに対する厳しいお仕込みであると思ふのであります。

年祭活動の二年目を迎えました。厳しいお仕込みに対し、どの

点をお知らせくださっているのか、いろいろと振り返り、思案して、気づいたところがあれば改めて、歩みを進めることだと思ふのであります。

教祖百四十年祭は、私は前回の年祭に倣って、一月二十六日、一日に勤めさせていたきたいと思つていきます。再来年の一月二十六日は、その年祭の当日、一つのゴールであります。しかし、その日に何かするのではなく、その日を目指してつとめ励んで、どれだけ成人することができたかをご覧いただくところに意味があるのであります。この三年千日の歩み方が大切であります。

三年千日は、立教一八九年一月二十六日のための準備期間ではなく、もうすでに本番であります。普段よりひながたを強く意識して毎日を通る。昔から、非常時と言われませんが、普段とは違う緊張感を持つて歩む時であつて、いまは何をしなければならぬ旬であるか、各人の立場で何をしなければならぬかを見失わずに、年祭への活動を着実に進めていかなければ

ばならないと思ふのであります。

こういう大ごとが起こつたのでありますから、なかには心が倒れてしまった人、気持ちはあるが動こうにも動くことができない人がいるのは、当然のことであります。そこは、上級の教会長など、関わる人がしっかりと心を通わせて、一日も早く立ち直るご守護を頂けるようにつとめてくださるようお願いしたいと思います。

また、年祭へ向かつて歩もうという、その気持ちを保持して歩む人を一人でもご守護いただく、そのための丹精もしっかり進めていただきたいと思ふのであります。

最後に、これはお知らせであります。父(三代真柱様)の年祭を、今年、出直して十年になりますので、十年祭を、命日である六月二十四日に勤めさせていただきます。ということを最後にお知らせさせていただきます。

どうぞ、本年もよろしく願ひします。

(『みちねとも』R187・2)

【大教会長様年頭の挨拶】

立教187年、あけましておめでとうございませう。

昨年は、教祖140年祭に向かう年祭活動期間1年目の年として、大教会で定めた、「つながろう、おやさまのお心に。つながりよう、信仰の喜びを。」の活動方針と、「ひながたを学び、そのお心を実践しよう。」の活動目標のもと、それぞれの教会でも、目標と実践項目を定めていただき、この1年間の成人の歩みを進めました。

昨年1年、それぞれの持ち場・立場で精一杯努めくださり、誠にありがとうございました。

まず、真柱様のごあいさつのなかで一番大切だと思うことについてお話しします。

それは、①「年祭当日に何かするのではなく、その日を目指してつとめ励んで、どれだけ成人することができたかをご覧いただくところに意味がある。この三年千日の歩み方が大切」、②「三年千日は、立教一八九年一月二十六日のための準備期間ではなく、すでに本番」、③「普段よりひながたを強く意識して毎日を通る。普段とは違



年祭活動2年目を通るうえでの
思いを述べられる大教会長様

う緊張感を持って歩む時であつて、いまは何をしなければならぬ旬であるか、各人の立場で何をしなければならぬかを見失わずに、年祭への活動を着実に進めていかなければならない」ということです。

▼あるべき姿を常に模索する一年に

年祭活動1年目を終え2年目が始まるに当たり、それぞれの教会の目標・実践項目を継続するか変更するかを昨年お尋ねし、それぞれで決めたものを提出いただきました。そのうえで、あらためて、この1年間、どのように通るかということですが、持ち場・立場

に相応しい振る舞い・あり方をあらためて問い直して、問い続けていただきたいと思ひます。

自分自身が与えられている、その立場、教会長という立場、家庭であれば子供の親、奥さんの旦那さん、いろんな立場がありますが、それぞれの立場に応じて、親神様・教祖がお喜びくださるに相応しい振る舞い・行いとは一体どういふことかを、あらためて、思案していただきたい。そして、その思案し続ける1年にしていただきたいと思ひます。

持ち場・立場で何が相応しいか、何をすべきかは、それぞれで違つてきます。

教会であれば、教会がどのような場所にあるのか、回りにどのような人が住んでいるのか、繋がる信者さんほどんな方がおられるのか、それによつて、自分自身だけで為すことなのか、それとも、教会に繋がる方を巻き込んで何かを為すのか、そういったことも違つてくる。

それぞれで何をすべきかというのは本当に違つてきます。しかし、その何をやるのかの根本、それぞれの心というものは、同じになつてくると、私は

思うのです。それは、親神様・教祖にお喜びいただける、受け取つていただける心でおつとめいただきたいと思ひます。

教祖のお言葉に
何するも、皆、神様の御用と思ひ
てするのやで。 (篇65)

また、
塵一つ拾うても誠。大きな木取り
片づけても真実といえん事もあ
る。：：心の持ち方、思ひ方が大
事やで。(教祖口伝 明8・6・14)
というお言葉があります。

それぞれ、ご自分の与えられた今の立場をしっかりと思案し、思案し続けながら、その相応しい行いをしっかりと積み重ねていく。そういった1年間にさせていただきたいと、そのように思ひます。

▼全員参加の年祭活動

昨年、この年祭活動は、笠岡に繋がる全員に、年祭活動として動いていただきたい、教会のようぼく・信者だけではなく、こどもたちにも「年祭活動の風」というものを感じてほしいとお話ししました。

昨年の秋季大祭では、真柱様も次の

ように仰いました。

教祖は、50年もの間、どんなことが起こっても諦めることなく、丹精し続けられたということ、これもひながたとして忘れてはならないことなのではないかと思うのであります。

どんなことが起こっても諦めることなく丹精し続けられた、そのひながたをわれわれも忘れずに、この笠岡大教会、それぞれの教会に繋がるよう、信者の皆さま方一人ひとりに、この年祭活動を少しでも実践してもらえらうに、しっかりと声掛けを継続していただきたいと思ひます。

▼「ふし」に籠もる親心に感謝して

年祭活動1年目を送るなかで、昨年1年間、様々なことが起こりました。「たすけの旬」であるこの年祭活動期間にはいろんなことが起こつてくると、昨年のこの場で申しましたが、本当に、普段以上のいろいろなお見せいただきました。

そのなかで、私自身、どうしても「つらいな。しんどいな。」と感じてしまふ出来事、特に、人の出直や身上・事情ということをよく耳にしました。

ですが、そのたびに、あらためて思わせていただくのは、どんなことを目にしても、どんなことを耳にしても、そこには、「陽気ぐらしをさせてやりたい。たすけてやりたい。心の成人をさしてやりたい。」という親心、をやるの思いが、必ずあるということ。そのことを忘れてはなりません。□

特に「つらいな。しんどいな。」と思うときにこそ、この忘れがちなをやるの思いをしっかりと見つめ、ふしのなかにある喜び・感謝を見つめて通る、そういう1年にもさせていただきたいと思ひます。

以上、年祭活動2年目を通るうえで思うところを、3点、お話ししました。

最後に、何点かお伝えします。

まず、2・3月の部内巡教は、それぞれの教会で定めた目標と実践項目について、祭典後の巡教員の話のなかで触れますので、その内容について事前にご相談することがあれば、あらかじめ巡教員と相談してください。

また、昨年5月にコロナの扱いが変わって一段落したところではあります。祭典後の食事などについては、教会によってそれぞれかと思ひます。

で、そこは、巡教員と事前にご相談ください。

それと、年祭活動期間の本部からの打ち出しとして、ようぼく一斉活動日の第1回目が、昨年、開催され、今年、2回目・3回目があります。開催日や内容は、お住まいの支部によって変わってきます。

このようぼく一斉活動日について、1点、私があらためてお願いしたいこと、それは、このようぼく一斉活動日を、この時旬のおちばからの声として受け止め、まず、積極的にご参加いただきたいということ。教会に繋がるようぼくの方にお声掛けいただくのはもちろんのことですが、まず、教会長さん・布教所長さんご本人が、積極的に参加していただきたいということ、どのような思いでそれに参加するか、受け止め方が大事です。

ようぼく一斉活動日に参加して何を持って帰るのか、どんな喜びを見つけて自らの日々の信仰生活に映していくのか、そこをしっかりと受け止める心で、ご参加いただきますようお願いいたします。

この後、「おたすけ推進の集い」を開催します。

教会長・教会長配偶者・布教所長、それぞれの立場で、どのような角目でこの年祭活動を通るかを思案する助けになると思ひます。

「①日々のにをいかけ／②積極的なおたすけ／③ちばの理を戴く」の3つの項目でお話しいただきます。

また、聴いた内容からどんな感想を持ったかを共有しあう時間も設けています。

しっかりとお聴き取りいただき、ご自身の立場での思案を進めるうえでの一助としていただければと思ひます。

年祭活動2年目を通るに当たっての私の思いをお話ししました。

この時旬に、それぞれの立場で何をすべきかを、あらためて思案し続け、自分の立場に相応しい行い、親神様・教祖にお喜びいただけるに相応しい在り方ができるように、お互いに勇ませあつて、この年祭活動2年目をお通りにいただきますよう、よろしくお願ひいたします。

春季大祭講話

教祖にご安心頂ける

年祭活動に

世話人・板倉知幸先生

立教187年大教会春季大祭は1月21日、大教会長様祭主のもと役員・部内教会長・布教所長・よふぼく・信者ら参拝のもと執り行われた。

ご参拝くださった新世話人・板倉知幸先生は、初めての当教会ご参拝に際して、『諭達第四号』に則って話を進められ、教祖に直にお伝えされた高弟の先生方の逸話や身近なおたすけ談などを交えて、教祖140年祭三年千日活動の残された2年で、教祖にご安心いただけるような成人の実を挙げられるように、2年目を歩む私たちの心の置き所をお話しくだされた。

(講話要旨は次の通り)

ただ今は、教祖140年祭に向かう三年千日2年目のスタートという時期になつてきています。

あつという間の1年間で、「もう1年過ぎた」というのと「まだ2年ある」という複雑なところですが、「まだ2年ある」というところで、あらためて、「教祖の年祭」、そして「ひながた」ということについて、思うところをお話ししたいと思います。

▼教祖年祭の意義

明治20年陰暦正月26日、教祖は現身をおかくしになられました。教祖はご存命です。私たちが人間が亡くなった人を偲んで行う「年祭」とは全く違うものです。

教祖はご存命で世界たすけの先頭に立って働かれています。私たちをお導きくださっています。その親心にお応えすべく、よふぼく一人ひとりが教祖の道具衆としての自覚を高め、仕切つて成人の歩みを進めることが、教祖年祭を勤める意義です。

これまでの教祖の年祭を、少し振り返つてみたいと思います。

教祖1年祭

これは、残念ながら祭式中に警察が雪崩れ込んできて、式中中止せざるを得なくなりました。当時の方々にとっては、何とも残念な気持ちだつたらうと想像します。

教会本部が設置されていない、公認

がないことが主たる原因でしたので、一応、神道本局の公認を取ることができ、晴れて活動を許されるようになって、明治24年に**教祖5年祭**が勤められました。1年祭のときに止めに入った警察が、このときは警備に当たっています。この違いは当時の方々にとっては、何とも言えない喜びの姿であつたと思います。

この年祭から、「教祖の年祭」はどのように勤めれば良いのかをお導きくださるようになりました。

明治22年、次のような刻限おさしづをもつて、ひながたの道を通る大切さを示されました。

難しい事は言わん。難しい事をせいと、紋型無き事をせいと云わん。皆一つくのひながたの道がある。ひながたの道を通れんといふような事ではどうもならん。：：：ひながたの道を通らねばひながた要らん。ひながたなおせばどうもなるうまい。：：：五十年の間の道を、まあ五十年三十年も通れと言えばいこまい。二十年も十年も通れと言ふやない。まあ十年のうちの三つや。：：：僅か千日の道を通れと言ふや。千日の道が難しの

や。ひながたの道より道が無いで。：：：どんな者でも、ひながたの道を通りた事なら、皆ひながた同様の理に運ぶ。：：：三年辛抱すれば、落ちようと思つても落ちられん。(明22・11・7)

教祖10年祭は、おやしき拡張が進め

明治28年4月に初代真柱様がご身となられ、数度に亘りおさしづを伺われましたが、なかなか好転せず、今度はおぢばに本部員・分教会長一同が集つて心得を伺うと、「神のご守護の理の根本が良く分かつていないから皆を寄せた」と仰り、「全教が真の兄弟として心を一つに合せて精神を定め」ことをお仕込みになりました。

この後、一同のお詫びと心定めを受け取りくださるか、容態は落ちつき、7月には全快のご守護を頂かれ、明治29年陰暦正月25日、教祖10年祭が勤められました。

しかし、その翌月には、政府より「内務省訓令第12号」、いわゆる「天理教弾圧令」、通称「秘密訓令」が発令されました。なぜそのようなことが発令されたかは、道の飛躍的な進展に当時の政府が脅威を感じ国家の統一には天



新世話人・板倉知幸先生

理教が邪魔になったのだと想像します。

ですから、教祖が現身をおかくしになられてから、お言葉通り道は勢いよく伸びて、一説には「天理教布教師が行くところ、病院には患者がいなくなる」という風評が伝えられるぐらい、不思議なたすけが各地に現れて、入信する人が絶たなかったそうです。

明治29年の統計で、信者総数が約313万7千です。当時日本の人口が約4千万人ほどですから8%が天理教の信者だったそうです。

しかし、逆に社会の偏見・誤解・妬みなど、社会秩序を乱すものだと非難さ

れました。

内務省訓令の結果、教えられた教理を変えなければいけない状況が現われてきて、残念ながらそれに従う日が続きますが、明治32年頃から「一派独立運動」が始まります。

明治39年に**教祖20年祭**がつとめられました。社会情勢は日露戦争直後であり、大飢饉などがありました。お道としては弾圧のなかと、一派独立がなかなか認めてもらえない道中でしたが、多くの人がおぢばへ帰られました。この年祭を期に、この笠岡の道も大きく進展していったと聞いています。

そして、明治41年11月27日には、待望の「一派独立」を果たします。

明治40年3月頃のおさしづで教会本部のふしんについて諭され、ご本席様が出直しになれる6月まで「百日のおさしづ」が続きます。

そのなかには、**教祖30年祭**を迎えるに当たり、「ふしんの準備に3年、ふしんに5年」と神殿ふしんに関するおさしづがあり、10年掛かるおさしづを100日で仰ったわけです。

その後、明治43年から土持ちが始められ、44年に起工式、そして「大正ふしん」と繋がってきます。

勇みに勇んで教祖30年祭を迎えようと進んでいる最中、大正3年末に年祭を1年1ヶ月後に控えて、初代真柱様が出直されました。

大正5年に教祖30年祭がつとめられました。初代真柱様のお出直という大きなふしを乗り越えての年祭でした。

昭和5年には「昭和11年に教祖50年祭・立教100年祭執行」の旨が公示されて動いていきます。

2代真柱様は本教の歴史を振り返られ、本教の年祭は「ふしから芽が出る」

とのお言葉通り、教勢が進展する時句は同時にふしに出遭うときであるときれたうで、教祖が明治20年に現身をおかくしになって以来つとめられた6回の年祭は、いずれも本教史上大きなふしと立て合ってきたこと、しかし、

それにも関わらず、そのふしが返ってお道発展の肥となり道が進展する結果となつていと述べられて、教祖の年祭がふしであると同時に発展の旬であることを強調されました。

昭和11年1月に**教祖50年祭**、21年に**60年祭**、31年に**70年祭**が執行されますが、昭和27年の『みちねとも』には次のような記事が掲載されています。

教祖の「七十年祭」というこの言葉が、今、教内に波紋のように拡がりつつある。既にこれを布教の目標として目覚ましい活動を始めた教会もある。

が、現在、本部からは未だ従来の様な御年祭についての打ち出しはない。打ち出しを待たずして年祭の活動ということが、教内の一種の合言葉の様になり始めたというところに、これまでの余程異なった趣がある。

戦時下体制で迎えた教祖60年祭とは違い、70年祭は、すっかり年祭活動ができる、また、何の気兼ねもなく教祖の教えを堂々と実践し説くことができる、これらの思いが自然と年祭活動への勇んだ気運を生み出したと思われる。

また、おやさとかたの今後の展望と計画が発表され、実際にふしんが始まり、全教の勇みは頂点に達して、実動が形に現れてくるという喜びも見せていただきました。

その後、ご承知の通り、**教祖80年祭**、**90年祭**、そして、東西礼拝場のふしん、**教祖100年祭**と時を刻んできました。その後、100年祭の後に3度の年祭を通つ

てきました。

教祖140年祭を迎えるに当たって通るこの三年千日は、今までとは違ったやの思いを感じます。

というのも、教祖130年祭後の道の歩みとして、立教180年7月26日にかんろだいが倒され、翌年には、道の芯であられます真柱様がご身上になられました。そして、立教183年の年頭からコロナウイルスが世界的に流行して5類に分類されましたが、まだ余波を残しています。

道を信仰する者から、この三年千日をしっかりとめるようにというをやの思いを強く感じます。

▼ご存命の教祖の身近に

先人先輩方が通って来られた年祭は、その昔は、教祖のお姿を直に拝してお仕込みいただいた方々が勤められ、その後はおさしづを仰いでお導きいただき、教祖60年祭から70年祭ぐらいまでは、そういった人たちがまだ在世され、その先生方に教授された方々がたくさんおられました。

増井りん先生もお1人で、明治12年から教祖の身のお世話を仰

せつかり教祖より直に仕込まれた方です。

昭和7年頃に本部青年を務められたある先生が感じられたおりん先生のお話です。

その当時90歳のお歳でしたが、なかなかお元気でお背は丸くこぢんまりとした先生が、別席のお取り次ぎから人力車で本部の詰所に帰って来られました、西側の廊下で西の方を向いてお座りになりました。

私はちようどその日は詰所の当番でしたので、広い詰所の部屋を掃除しておりましたが、全部終わってもまだお座りになっておられます。先生が座っておられる廊下だけがまだ水拭きが終わっていませんので、お立ちになるまでお待ちしておりました。

「早くお帰りになれば」と思っていましたら、やがて、日が沈みかけ辺りが仄暗くなりかけた頃、やおやお立ちになりました、「長うお待ちせしましたな。私はなあ、今まで、親さん(教祖のこと)がお休みになるのをじつとお見送りしていましたんや。あんさんら、

寂しいと思いなさらんかな。私は寂しうてなあ、毎日、こうして、お見送りしてますのやで。」と目をシヨボシヨボされていました。

新入りの若かった私には「何をしておられるのだろう」ぐらいに思い、むしろ「早くお帰りになれば良いの」とさえ思っていたのですが「親さんをお見送り申しましたんや」と聞かされたときには、初めてお日さんを「親さん」と心からお慕いなされているお心に触れ、ついさつきまで「早くお帰りになれば」と思っていた自分が恥ずかしく、申し訳なく思ったことでした。

また、別の先生のお話です。

昭和8年10月24日の夜、ただ今の教祖殿が新築落成して鎮座祭が勤められた夜、当時まだ本部青年であられた井筒先生が、教祖殿お守り所の当番をなされていた。

厳かな御遷座祭典の後、おやしきの青年第一号であられた高井猶吉先生・宮森興三郎の両元老先生がお守り所に「ご休息にみえられ、井筒先生の汲まれたお茶にのどを潤されながらしみじみと両先

生が次の様に仰ったそうです。

宮森先生が「高井さん、おらあ親さんの仰ること、嘘と思わなかつたけど、この俺の目でこんな立派なお屋敷の姿を見るのは思わなかつたで。」

高井先生が「そやったなあ。」と仰り、続いて宮森先生が「ホンマやったなあ。」と言われ、また高井先生が「そやったなあ。」、宮森先生が「ホンマやったなあ。」と、この「そやったなあ。」・「ホンマやったなあ。」の応答は、それこそ、もつと何回も繰り返されつつ、お2人していつしか涙をボロボロこぼされていた。

というお話で、この物語をジッと側で聞いておられた井筒先生は、「私はそのとき、ゾツとしましたね。このお話を聞いて、私自身も、もう、もう、何か嬉しうて嬉しうて嬉しうてしようがなかつたですね。」と申されるのであった。

また、本席・飯降先生には次のようなお話があります。

本席様の晩年のこと、平野檜藏先生が本席様のご苦勞をお勞いし

ようと考へ、詰所に立派な庭園を造り、その落成祝いに庭のお好きな本席様をご招待し、心一杯のもてなしをされたことがあつたそうです。

やがて食事となり二の膳・三の膳付きの御膳が本席様の前に運ばれてきました。郡山部内の信者さんが国々から持ち寄つた真実の籠もつたご馳走であつたらうと思われまふ。ところが、本席様はいつまで経つてもジツとしていて箸を付けようとなさらない。平野先生始め役員の方々は、何かお気に障ることもあつたかとハラハラするばかり。

とうとう平野先生が堪りかねて「何かお気に召さないことでもございますか。」と尋ねると、本席様は「何の何の。こんなご馳走をしてもろうて、色々もてなしてもろうて何が気に入らんものか。儂は嬉しうて嬉しうてならん。けれど、こんなご馳走を出してもらつて、『ああ、あのとき、親さまにこんなご馳走を召し上がつてもらえたのやつたらなあ。』と思うと、勿体のうて勿体のうて心が一杯に

詰まつてしまふのや。」と仰せになり、ハラハラと御膳の前で涙をこぼされたのであります。

並み居る人々は皆一様に顔を伏せて共に涙を流し、声出す者もなかつたそうです。

教祖をお慕いする先人の気持ちに胸に伝わってくるようなお話です。

しかし、私たちが、実際に教祖にお仕えなされた方々の思いには、なかなか追いつくことはできません。

今を生きる私たちに信仰が伝わるまでの間には、世の中の人々の生活様式や物事の考え方で、世界の様相は随分と変わり、私たちが知り得る教祖の面影やお話は、すべて何代も前の道の先人を通して伝えられたものばかりです。

それだけに、お道の草創期の先人に比べて、意識のうえで、教祖が段々遠のいていることは否めません。だからこそ、時が経てば経つほど、私たちの方から、常に教祖に近づく努力をすることが必要です。

そのなかでも、10年に1度迎える教祖の年祭の旬は、その意識をより強く

持つて通ることが重要です。

教祖がお姿をかくされたことで、私たちはいつでも教祖と1対1でお話ができます。

お姿があつたときはそうはいきません。お会いする順番もあつたと思ひます。

しかし、今は教祖殿に行けばいつも居られます。教会の教祖殿にも居られます。そこで、悩み事やお願いをしたときなど、ふと、何かを浮かばせてもらうことがあります。

また、にいがけでは教祖のお供をし、おたすけでも教祖のお供をします。存命でありお姿がないということ、は、私たちは、存分に1対1で教祖とご一緒できます。

▼陽気ぐらひのひながた

では、教祖のひながたを辿るとはどういうことでしょうか。教祖はまず親神様の思召で貧の底に落ち切られました。これは「貧乏のなかなを通る」ということではありません。物を施すことによつて、

執着を去れば、心に明るさが生れ、心に明るさが生まれると、自ら陽気ぐらしへの道が開ける(典3章)

と教えられました。「執着を去る」ということです。

それと、物を施していくに当たつては、夫・善兵衛様へ、親神様の思いをお伝えしていく心遣いに変へて苦勞さされたと思ひます。夫・善兵衛様にとつて、代々受け継がれた家の将来を考えたとき、どのような思いで通られたかは想像が付きませんが、そのようなかをご家族で通つておられます。

この、容易ではないなかに親神様に頼りに家族で通るのも、ひながたの1つだと思ひますが、一貫して言えることは、教祖は、道中を親神様に凭れて、喜んで通られたということです。

▽水を飲めば水の味がする

しかし、人間、ふしのなかに喜んで通るといふのは、なかなか難しいものです。

心底喜ぶことはできないかも知れませんが、見方を変えて喜ぶ材料を探することはできます。例えば、コップに水が半分入つてるとします。これを、「まだ、半分ある。」と考えるか、「もう、半分しかない。」と捉えるかでは、考え方が正反対です。前者の場合は喜べますが、後者では不足になります。

ですから、論達にもあるように、「水を飲めば水の味がする」という言葉は、「味がする」↓「親神様がお働きくだされている」↓「食べる物が満足になくても、常に親神様のご守護が溢れている」と、そこを喜んで通るといふことです。

▽ふしから芽が出る

また、人間は、必ず、ふしに相当する身上や事情が起こってきますし、「いんねんの道」もあります。

別席のお話には、

因縁と道がございます。この因縁にも現世にて現れるものもあれば、先の世へ持ち越すものもあります。良き事をすれば良き理が沿うて現れ、悪しき事をすれば悪しき理が沿うて現れます。心に作りた理は心通り、善悪共に現れます。身上に現れる人もあれば、事情に現れる人もあります。

とあります。ですから、蒔いた種は必ず生えてくるのです。

続いて、

この世は、一軒限り一人限り、その日その日、旬が来たならば、

銘々に通り来たれる道は、善悪共に皆現れ出ます。何程通ろうまいと思っても、通りだけは自然に通らねばならん、また、通さねばならんと仰せられます。どんな人でも、何でも自分が幸せになりたいと思っておりますけれども、思う様にならないのは因縁。

と、蒔いた種は必ず生えてくるものなら、起こってくるこの原因は自らにあるから、結局、果たさなければいけないのがいんねんと教えられます。次に、

人間、身上に不足はありませんけれども、前生のほこりを持って生まれて出て来ると申します。

出直したら心のほこりはリセットされるのではなくて、積んだほこりはそのまま持つて出てくるということ。続いて、

そこで、世界の理を見ては成程、聞いては成程と十分に足納の理を治めねばなりません。足納の理は真の誠であります。

とあり、回りで起こってくることを聞くこと、見ることに、すべて、これは、自分が蒔いた種が原因で起こってくる

わけです。

「あの人が悪い事を言った。あの様な事をされた。」といつても、その悪口を聞かなければいけない、悪いことが身に降りかかってくるといういんねんが、自分にあるというわけです。

そこで、聞いては「成程」、見ては「成程」と、「もしかしたら、前世、前々世に何かそうなるだけの事をしたのかも知れない。」とたんのうの心を治めてくれと、そのなかを喜んで通つてくれということ。

「たんのう」というのは「我慢」でも「辛抱」でもありません。喜んで通る、苦しいなかに何か喜びを探して通つていくところが「たんのう」です。

そして、続いて、

身の不足あつて足納は出来ようまい。なれども足納は前生のさんげとも仰せられ、身上になれば喜ぶことはなかなか出来ない。しかし、そこを喜んで通る事が、前生積んだほこりのさんげになると仰せ下さる訳であり、そこをよく聴き取つて心を治めたならば、大難は小難、小難は無難となります。

と続きます。ふしがあるから成人ができるので

す。苦しいなかを通るから人の気持ちも分かるようになるだろうし、思案もすれば、心を定めて前へ進むことができるのです。

そのときは、辛く苦しい日々であっても、時が経てば、「成程」と思う日が必ず来るのです。

私も、13年前、白血病を患いましたが、その身上を通して、自分のいんねんの自覚の大切さであったり、そこから感じることでできる親神様のご守護や不思議を直に感じる事ができました。

ふしから成人の道が見えてくるというものです。

▽人救けたら我が身救かる

教祖のひながたは、たすけ一条の道です。

逸話篇に「人を救けるのやで」というお話があります。

大和国神戸村の小西定吉は、人の倍も仕事をする程の働き者であったが、ふとした事から胸を病み、医者にも不治と宣告され、世をはかなみながら日を過ごしていた。又、妻イエモ、お産の重い方であったが、その頃二人目の子を

妊娠中であった。

そこへ同村の森本治良平からにをいがかかった。明治十五年三月頃のことである。それで、病身を押し、夫婦揃うておちばへ帰らせて頂き、妻のイエガをびや許しを頂いた時、定吉が、「この神様は、をびやだけの神様でございませるか。」と、教祖にお伺いした。

すると、教祖は、

「そうやない。万病救ける神やで。」

と、仰せられた。それで、定吉は、「実は、私は胸を病んでいる者でございませうが、救けて頂けますか。」と、お尋ねした。すると、教祖は、

「心配要らんで。どんな病も皆御守護頂けるのやで。欲を離れなさいよ。」

と、親心溢れるお言葉を頂いた。

このお言葉が強く胸に喰い込んで、定吉は、心の中で堅く決意した。家にもどると早速、手許にある限りの現金をまとめて、全部を妻に渡し、自分は離れの一室に閉じこもって、紙に「天理王尊」と書いて床の間に張り、

なむてんりわうのみこと なむてんりわうのみこと

と、一心に神名を唱えてお願いした。部屋の外へ出るのは、便所へ行く時だけで、朝夕の食事もその部屋へ運ばせて、連日お願いした。すると不思議にも、日ならずして顔色もよくなり、咳も止まり、長い間苦しんでいた病苦から、すっかりお救け頂いた。

又、妻のイエも、楽々と男児を安産させて頂いた。早速おちばへお礼詣りに帰らせて頂き、教祖に心からお礼申し上げると、教祖は、

「心一条に成つたので、救かったのや。」

と、仰せられ、大層喜んで下さった。定吉は、「このような嬉しいことはございません。この御恩は、どうして返させて頂けますか。」と、伺うと、教祖は、

「人を救けるのやで。」

と、仰せられた。それで、「どうしたら、人さんが救かりますか。」と、お尋ねすると、教祖は、

「あんたの救かったことを、人さんに真剣に話さして頂くのやで。」

と、仰せられ、コバシ(誂、ハツタイ粉に同じ)を二、三合下された。そして、

「これは、御供やから、これを、供えたお水で人に飲ますのや。」

と、仰せられた。

そこで、これを頂いて、喜んで家へもどってみると、あちらもこちらも病人だらけである。そこへ、教祖にお教え頂いた通り、御供を持っておたすけに行くと、次から次へと皆救かって、信心する人がふえて来た。(篇100)

というお話です。

欲を離れて、一条心すじになるといふことです。——いままでは、自らが身上で苦しんでいるから、当然、「人をたすける」ということには全く関心もなかったし、思い浮かばなかった。しかし、「人をたすける」という、その心を持ったことよって、回りに苦しんでいる人がたくさんいることに気付くわけです。——「たすけ一条の道」こそが、教祖のひながたです。やはり、常に人をたすける心を持って、その気持を持って周囲に目を配ることが望まれます。

▼ひながたの実践

論達によふぼくとしての具体的な歩み方が分かりやすく示されています。

教会へ足を運ぶ、また、おちばへ帰ることも不可欠です。

また、ひのきしんの実践ということを考えれば、ひのきしんの態度というものに常に心を持っておく必要があると思います。

ちよつと前ですが、東京で街を歩いてみると、前に重い荷物を持った女性が横断歩道を渡っておられた。そのとき、私ではなくて、若いサラリーマンがサツと行って、その方に「荷物を持ちましようか」と訊いた。そういう心遣いというのは常に持つておかなければ出てきません。

私はその姿を見てショックを受けました。一応、私、これでもよふぼくです。一応、私、これでもよふぼくです。一応、私、これでもよふぼくです。一応、私、これでもよふぼくです。

親神様への感謝の行いがひのきしんですが、ひのきしんの態度というものに常に心に築きながら生活していないと、ハツピを脱いだらよふぼくを忘れてしまうということになりかねません。

また、この教祖年祭を通じていくらかでは、当然、おさづけが大切で、自らが率先してお取り次ぎすることはもちろん、この旬に、よふぼくの方々すべてに取り次げるように成人してもらうことが大切です。

10年前、教祖130年祭へ向かっている三年千日の真っ直中でしたが、ちょうど年祭活動に入った10月頃のこと、修理巡教に回ってから帰ってくると、一番下の小学校1年生の息子が、それまでは元気に通っていたのに、「頭が痛い」と言い出しました。

ちよつとした頭痛だろうと心配しませんでした。余りにも毎日言うので病院へ連れていきました。

最初は、ちよつと様子を見ようという事で一遍帰りましたが、土・日を含んでまた痛がるから月曜日に行くのと、今度はCTを撮ることになりました。

CTを撮った結果、小脳が腫れているが、なぜ腫れているのか、MRを撮ってみないと菌が入ったのか脳腫瘍かは分からない。脳腫瘍なら処置できないので、他に移るということで、もしかしたら出直すかとも思いました。MRの結果は幸い脳腫瘍ではなかつ

たが、原因が分からないので、髄液を取って調べるといふ手もあるが、脳が腫れているところに背中から髄液を取ると脳が下がって窒息する可能性がある。調べるのは止めました。

結局、なぜそうなったかは分からないが、取り敢えず治療はしなければいけなくて、海外で22例ぐらいあるから、その例に沿うということでステロイドを注入する治療をしました。

1週間ほどしてステロイドが効いてきたのか、腫れは段々と引いてきました。小脳は運動神経を司るところなので、1週間、息子は寝たまま歩けない。それまで元気に走り回っていた息子が、急にそういう状況になって便所にも行けない。ちよつと元気になってきても歩けないという状況でした。

医者はやるだけのことはやってくれて、後はもう人間の力ではどうにもならない。障害が残るかどうかは分かりませんが、とにかく朝夕おさづけを取り次いで、必死にお願いしました。

そうする内に、あるときを機会に、本人の脚の運びが見違えるように良い方向へ変わっていききました。なぜか分かりません。もう、おさづけの取り次

ぎとしか言い様がありません。

そして、ちょうど1ヶ月後に退院できたのです。

退院はしたがリハビリには通わなければと言われて連れていくと、もう快復しているから来なくても大丈夫と言われました。

それはやっぱりうれしかったですが、なぜご守護がいただけたかというのは、おさづけしか考えられません。

当然、それまでも、自分でもおさづけを取り次いでいますし、大切なことは分かっています。息子の身上で、本当におさづけの偉大さ・大切さを痛感しました。

その後、定期的に検査してもらおうと、小脳は真っ白で機能していないが、大脳の一部が小脳の替わりをして、それが動いているとのこと、活動は普通通りに天理高校で元気に野球を練習できるといふ不思議なご守護を頂きました。

そのときは130年祭三年千日で、「おたすけ」「おたすけ」と人にも言いながら自分もその積もりで通ってはいませんが、神様から「まだまだや。お前、何をしてるんや。」と言われたような気がしました。

そんななか、その半年前に、信者さんが膠原病になり、医者に調べてもらうと、胸の奥の方の普通では絶対に分らないような場所にガンがあることが分かりました。

手遅れになる前で良かったとは言え、直ぐ抗ガン剤治療でガンを小さくして取り除かなければいけないので入院を繰り返しました。

入院中は、私もおさづけを取り次ぎに行き、何とかガンも小さくなってどうにか取り除きましたが、まだ少し残っているという状態でした。

その後、経過も良く、数ヶ月後に再検査をすると、ガンが少し大きくなっているが、抗ガン剤治療をするほどではないので、年明けた1月に再検査することにしました。

そのようなときに、先ほどの息子の身上があったのです。

その方の奥さんは信仰2代目で、自分の家の講社祭は欠かさず参拝していましたが、特に身上で困ったということもなく、自分でおさづけを取り次いだことはなかったらうと思います。

本人には、全然、信仰はありませんでしたが、息子さんが天理中学校を受験したことで、別席だけは運ぼうとい

うことでおさづけの理を戴かれて、それつ切りでした。

ですから、神様が急ぎ込んでおられるとは思いつつも、そのご夫婦の家まで行っておさづけを取り次ぐことを躊躇していました。本人が未信仰なのでついつい私に遠慮があつてどうしても家まで行くことができませんでした。

しかし、教祖から追い風を頂いて私の子供の身上もあり、奥さんをお願いして、夫婦で毎日おさづけに通いました。

そうして1月22日に診察を受け、24日には、大きくなっていたガンの成長は止まったので抗ガン剤はまだ打たなくて良いという結果でしたので、「今後は、週に何回か通いたい、その他は奥さんがおさづけを取り次いで頂きたい。」とお願ひすると、奥さんも「実は、私もそう思っておりました。」というところで、私の思いと奥さんの思いが一致して、それから、私たち夫婦が週に1回、その他の日は奥さんが、おふぼくとしておさづけを取り次いでくれています。

10年前のことですが、今もご主人はガンが残っている状態で、元気に仕事をしておられます。

おふぼく全てがおさづけを取り次いでおたすけに励むことができれば、道の進展に大きく影響を及ぼすのではないのでしょうか。小さな波かも知れませんが、それが集まると大きな波になり、世の中を変える何かに繋がるような気がします。

全よふぼくがおさづけを取り次いで年祭活動を推し進めれば、これほど力強いことはありません。

教祖年祭はたすけの旬、たすかる旬です。普段よりも増して、親神様のお働きを肌で感じる事ができるのが年祭の旬です。動かなければ勿体ないということに尽きます。そして、「何でもおたすけ」というその気持ちに神様が働かれ、教祖が導かれます。

これも教祖130年祭のときの話ですが、立教175年の秋の大祭で、ある大教会長さんが諭達を聴いて感動され、「これからはおたすけや」といって、帰って来られた翌日、町の役所の用事から帰ったときには様子がおかしく、いびきをかいて寝ておられるのです。医者である息子さんが診ると、瞳孔が開いているので、すぐに病院へ救急搬送すると脳内出血で意識不明、2・3日の

命と宣告されました。何とか手術をして一命は取り留めましたが、依然、意識不明の重体です。

奥様は、「勇んで取り掛かろう。」と思つたときだけに、「なぜ？」という思いが起こつたそうですが、「神様のする事に間違い無い。」と思い返して、あらためて、一生懸命、努め始めたそうです。

おさづけのお取り次ぎと十二下りのお願いづとめが連日続けられ、部内の会長さんやよふぼくの方々が、何とかという思いから、皆が真剣におさづけの取り次ぎに励まれたそうです。奥様も必死でおさづけのお取り次ぎを実行されました。

そのとき、「助かりたい、助かりたいでは助からん。助ける理が助かる。人様の助かりを願わなければ助けて頂けない。」と思つて、またおたすけに拍車が掛かつたそうです。

1年9ヶ月して、意識は戻らないまま退院すると、1人の看護師がお礼に来られました。

大教会長さんの奥さんが「いままで、面倒をみてくださつてありがとうございますと、お礼を言うのはこちらからではないですか？」と言うと、「実は、

〇〇さんは不思議な人で、逆に私がたすけられました。看護師という仕事はいろいろな患者さんをお相手します。時には夜中に呼び出されて怒鳴られることもありますし、疲労困憊状態が続くこともあります。しかし、〇〇さんをお世話取りすると、なぜか心が和むのです。そうして、何回も心を助けられました。だから、お礼を言いに来たのです。」と、全く信仰のない看護師がお礼に来られた。

話せなくても、直接おさづけを取り次げなくても、「何とかこの人にも助かって頂きたい。」という思いが、人の心に働き掛けることがあるということ。その大教会長さんは、回りが意識がないと思つていただけで、本人の心には意識があつて、おたすけを実行されていたのかも知れません。

結果、自らの身上を通して、部内教会長・よふぼく・信者の方々の成人を、身を挺して行われた。年祭を待たずして出直しはされましたが、教祖年祭を自ら率先して通られた結果ではないかと思ひます。

また、教会としては、外へ向かつての布教と内への丹精という2つの重要

課題があります。

ある大教会長さんが会長就任に際して、元氣のある教会はどう違うのかというところで、いろいろな教会を回られ、外へ向かって布教している教会が元氣があるという結論が出たそうです。

内への丹精も必要ですが、外に向かつての布教、――直接的な戸別訪問、にをいがけ、地域の方々との繋がりを大切にしていける、――そういった外への布教が肝心で、地域に根差した教会のそういう姿が望まれていると思います。

▼**教祖にご安心いただける年祭活動を**
教祖の年祭は、動いたら、動いただけの働きをご守護いただけます。

教祖一人から始まったこの道を、先人はひながたを心の頼りとして懸命に通る、その成果を私たちに残してつないでくださいました。

これから、その信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと伝承していくのは、私たちの使命であり、引き継いでいく一歩一歩の積み重ねが、末代へと続く道となります。

残り2年となったこの3年の動きが、次の150年祭・立教200年というまた

とないときへ繋がっていきます

し、繋げていかなければなりません。常に、道を後生へ伝えていく努力を怠ってはいけません。

教祖にご安心いただくには、時間が必要ですが、お喜びいただくことは1回のはこびでできるかも知れませんが、ご安心いただくには時間が必要であり、内容が伴わなければいけません。

後2年ですが、教祖にご安心いただける三年千日の道を通らせてもらいたいと思います。

残り2年、成人の旬としてどのようなお導きがあるのか、先を樂しみに通らせていただきますように。

苦勞を樂しんで通る残りの年限に、年祭当日、教祖に「よう頑張ったな。」と、こう言われる通り方を目指していきたいと思えます。



春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます

親神天理王命の御前に 会長上原明勇 慎んで申し上げます

親神様には 一列こどもの陽気ぐらしを樂しみに この世と人間を御創造下されたばかりではなく、「いちれつのごどもがかへいそれゆへにいろく心つくしきるなり」と 親心をもってお導き下さっております事は誠に有難く勿体ない極みでございます 私どもはこの思いにお応えするべく 日々は朝夕に御礼申し上げつつすけ一条の御用の上に努め励まして頂いております

その中にもこの月二十六日は 教祖が世界だすけの為 扉開いてろくちに踏み均しに出られた尊い日柄に当たり おちばでは春の大祭がつとめられますので 当教会でもその理にならい 只今からおつとめ奉仕人一同 喜び感謝の心一杯に 明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて春の大祭を執り行わせて頂きます 御前には寒さ厳しき中をも厭いません 今日の日を樂しみに寄り集いました道の子供たちが 相共にお歌を唱和し 日頃の御高恩に改めて御礼申し上げます 状をご覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて本年は教祖百四十年祭に向けて三年千日と仕切つての年祭活動二年目の年であります 大教会で定めた方針と目標 それぞれの教会で定めた目標と実践項目のもと 一年目の動きを継続発展させて より一層ご存命の教祖にお喜び頂けるよう努め励ませて頂く所存でございます また本日は世話人板倉知幸先生に初めてお越し頂いております お聞かせ頂くお話を 時句のおちばの声として 真摯に受け止め この二年目の成人の歩みに繋げさせて頂きたいと存じます

何卒親神様には 陽気ぐらしを目指してすけ一条に励む皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして 万たすけの上に自由の御守護を賜り お望み下さる陽気ぐらしの世の状が一日も早く実現しますようお導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

立教百八十七年 春季大祭 祭典役割表

胡弓	三味線	琴	小鼓	すりがね	太鼓	拍子木	ちゃんぽん	笛	おつとめ			てをどり			地方			役割 区分	講話	祭主	扨者
									大教会奥様	上原繁道	前会長様	大教会奥様	前奥様	中奥様	田中ますみ	岡崎真一	谷内伸自				
															前 半	三月講話	賛 者	指 図 方			
																			浅野明教		佐藤真孝
															後 半	中島誠治					
今川佐智子	門脇加津	佐藤香苗	虫明立生	吉岡壽	三島渉	中村剛	谷内伸自	岡崎真一	田中ますみ	前奥様	大教会奥様	上原繁道	前会長様	大教会長様	中村義太郎	今川昌彦	佐藤道孝	板倉知幸先生	大教会長様	岡崎真一	
三島照美	内海安子	岡崎豊子	赤木素志	高木昭祥	内海史郎	山田敏教	虫明立生	浅野明教	山野なつ	中村初美	上原順子	山野弘実	上原浩	門脇元教	渡邊隆夫	中村道徳	田中隆之	三月講話	浅野明教	佐藤真孝	
室悦子	上原千枝子	谷内美知子	岡崎真一	谷内秀自	三代温生	佐藤真孝	岡田善誠	杉原善朗	吉岡八恵	横山小智	武内正美	横山逸郎	吉岡誠一郎	上原志郎	上原繁次	田林久嗣	中島誠治	中島誠治	門脇元教	浅野明教	

立教187年
春の学生
おぢばがえり
～次代を担うようぼくへ～

立教187年
(令和6年)

3/28 - 10時：式典「真柱様お言葉(メッセージ)」(本部中庭)
式典後 直属アワー

3/27 - 19時：春Fes (東西泉水プール前広場)

直轄委員部長・
委員研修会 開催
婦人会

婦人会笠岡支部(上原きよ代支部長)は2月3日、大教会で直轄委員部長・委員研修会を開催し、29人が受講しました。

10時からの開催ですわりつとめを行った後、支部長様から年祭活動2年目を迎えた本年の支部の動き、大教会の動き、婦人会長様の思いなどについてお話しがありました。



年祭活動の歩み方を話される支部長様

コロナ禍の3年間で動きが止まっている教会は、どうしたら教会に足を運んでもらえるようになるか考え、丹精のための動きを作ってほしい、教えを学ぶだけでなく、学んだ教祖のひながたを自らが行って、通って、その姿を日々周りの人たちに見せることも大切であると、話されました。

又、感話では、「お役を頂いて」と題して、田中つかさ女子青年担当者と吉岡八恵ホットテラス担当者が、それぞれの思いをお話しされました。午後からは、5班に分かれて、今後



本年の歩み方についてねりあう参加者

の歩みについて、ねりあいを重ねた後に、本年の動きについて、銘々心定めさせて頂き、お楽しみ行事のビンゴゲームで和やかな時を過ごすこともできました。

最後に、武内正美委員は、教会は、それぞれ教祖にお喜び頂きたいという歩みを止めないよう、定めた心をこつこつとつとめさせて頂きましようという講の挨拶をされ、勇み心で終わらせて頂きました。

(記録係 桑田 恵美子)



ビンゴゲームで、いつもの笑顔になって散会

談話室
島根教区 教誨師

三代温生氏に感謝状!!

感謝状

あなたは多年にわたり教誨師として矯正施設における被收容者の指導にあたり、その功績は誠に顕著でありますよってここに深く感謝の意を表します

令和五年六月二十七日

広島矯正管区長 日向正己

1月30日 島根教区会議の冒頭に、稲葉教区長より、代読のあと、授与されました。このような感謝状は滅多にお目にかかることは出来ません。と教区長からも祝意を頂かれた。

三代温生先生は16年間、教誨師として継続して務められてこられました。被收容者の更生への指導にあたられて、人のため世のために必要な人間へと更生への道を、導いてこられました。

その中には、親身な心を通じた被收容者からの手紙が数十通あります。御礼やら今後の真つ当な気持を正直に書



いてあったそうです。
 先生は、受け持ち時間の80%を被収容者の話しを聞いて、心が軽くなったら、教理をもとに心の持ち方、人との関わり方、親兄弟への想い、そう云った事を取り次いでこられたのです。
 先生は、道一条を真つ直ぐにお通りに成り、心から、教祖のように伝えられて、崇高な面持ちで、信仰の信念を、信じて疑わず、推し進められます根性があるのです。
 前会長(父親)の厳しい教訓と叱責をも手本とされる孝行者、更には、奥様への愛情は、これに勝る人は・・・見受けません。
 今日の受賞への道のりは、奥様の理解や協力が無くしては在り得ない！と申し上げても過言ではありません。
 今後の活動の上にも、共々に歩んで行かれるものと、拝察しながら・・・。

もう高齢で認知気味な私ですが、これを伝えずして、三代温生先生への恩返しの一分に成りましたら幸いで御座います。
 (かさおか編集掛OB)



今年1月のある日の昼前、私は車にガソリンを入れ、その帰りに食材を買うためスーパーに寄り、グッドタイミングで入口近い駐車スペースが空いたので、そこに頭から突っ込み、買い物済ませて出た。

昼時なので切れ目ない車の動きに注意しながらバックさせていると、左側後部座席の窓ガラスをドンドンと強く叩く男性がいた。何事かと思い助手席の窓を開けて「なにッ！」と見知らぬ30歳くらいの男性に向かって言った。男性は「身体が当たって足をタイヤで踏まれた。」と言うのだ。「当たり屋かッ！」と思いつながら、車はその状態にしたままエンジンを切って男性と店内に入り、私は店員に「当たってもないのにいんねんを付けられている。」と

話すと他の店員と相談した後、警察を呼んで下さい。との事だった。

私は放置した車を移動させなければと一旦車に戻った。その間男性は店内の休憩スペースで椅子に腰掛けて待っていた。私は車に戻った途端、警察を呼んで時間を割くのがバカバカしく思い、「こんな男性に付き合っていない！」「思い無責任にもそのまま男性に声も掛けずに家に帰った。

30分程して家に2人の警察官がやって来て、「被害届が出てます。」と言う。スーパーの防犯カメラで割り出したそのうだ。それから免許証・車検証・保険証のコピーを取られ現場検証があると言われ、スーパーに戻る事になって実地検分が行われた。警察官は「今後本人、または保険会社から連絡があるかもしれないので」と私の携帯電話を聞いた。続けて、「先方が医者診断書を出してあなたが示談に応じていなかった場合、車の方が悪いとの位置づけだから刑事事件扱いに発展するかもしれない。」とまるで脅しの様

な事を言う。

その場はそれで終わりとなり私は、歩くより遅いスピードでバックしている車に当たった、足を踏まれた、と言いつつ男性に腹立たしい思いで家に帰った。その後1時間程して同じ警察官から電話があり、先方が大きな怪我もないので被害届は取り下げる、との事だった。男性は「私の第一声に腹が立った。」と言う。すぐに謝ってくれていたら警察に連絡する事もなかった。と男性の話を警察官が伝えてくれた。

思わぬ事態に出くわした時には冷静な判断で対応しなければと反省した出来事だった。
 (む)

お道の仲間と共に学び合い
 陽気ぐらしの実践へ

ようぼく講習会

立教187年

【お問合せ】教養室庶務掛
 ☎ 0743-63-2109
 ✉ yoboku-k@tenrikyo.or.jp
 https://www.tenrikyo.or.jp/yoboku-kosyukai/

ようぼく講習会 🔍 検索

HPはこちらから